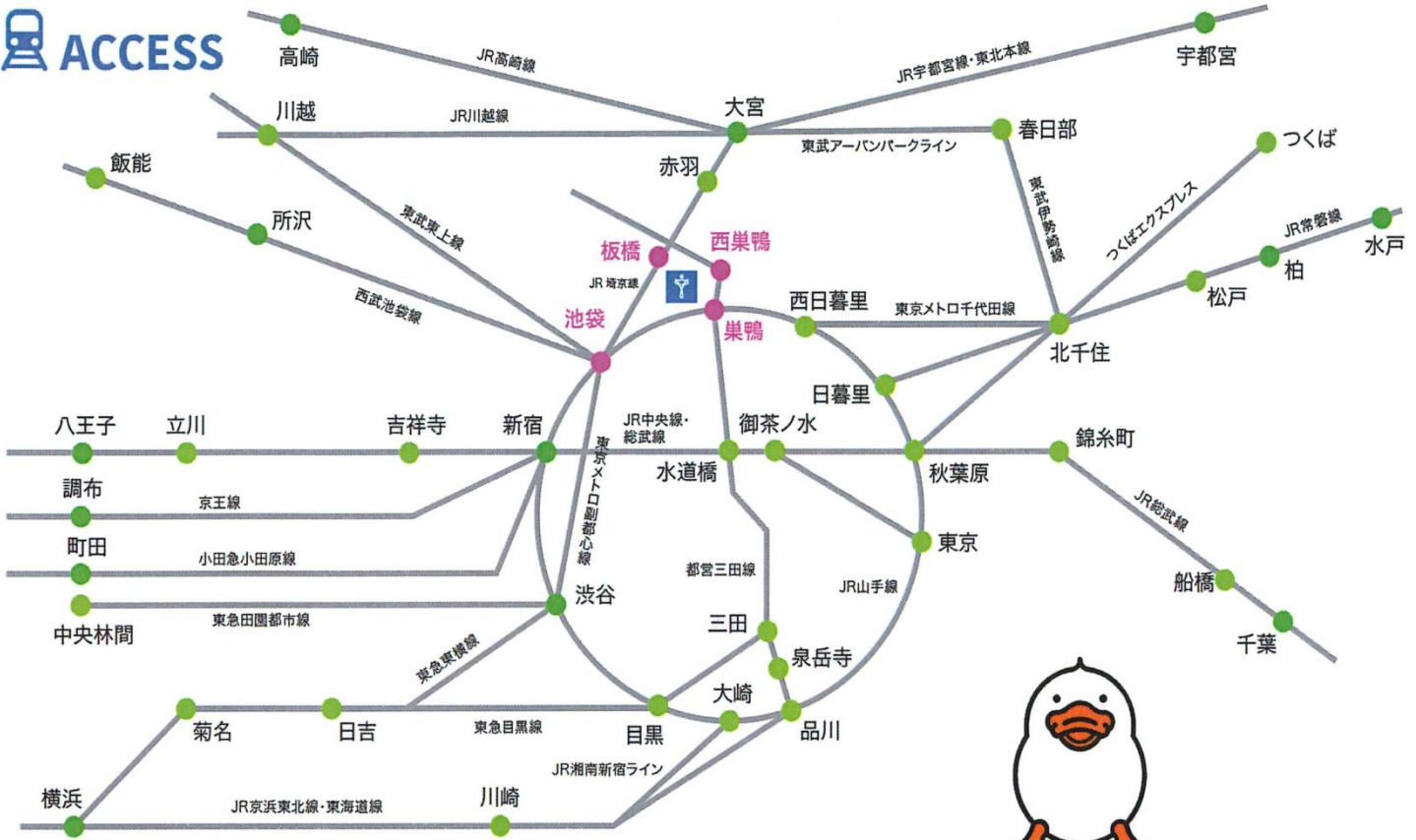


# ACCESS



## 【最寄駅までのアクセス】

○電車をご利用の場合

都営地下鉄三田線……西巢鴨駅下車 徒歩 2 分

JR 埼京線……板橋駅東口下車 徒歩 10 分

都電荒川線……庚申塚駅又は新庚申塚駅下車 徒歩 7 分

○バスをご利用の場合

池袋駅東口から都バス……堀割バス停下車 徒歩 2 分

6 番乗り場 西新井駅前行き、北車庫前行き、新田一丁目行き

7 番乗り場 浅草雷門南行き

12 番乗り場 とげぬき地蔵前行き

13 番乗り場 浅草寿町行き

○東京駅から（約 30 分）

東京（山手線内）⇒巢鴨（都営三田線乗換）⇒西巢鴨

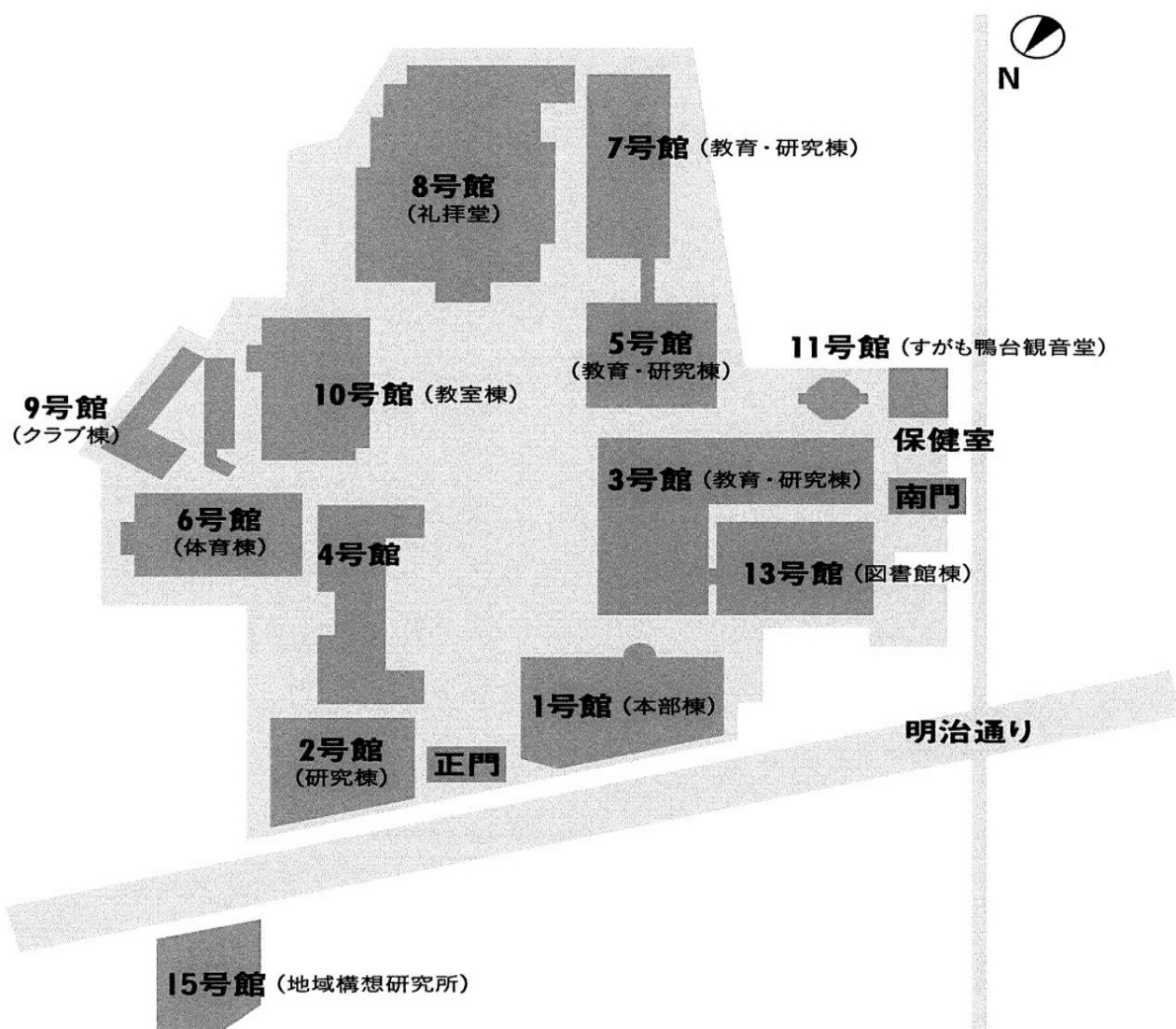
○羽田空港から（約 60 分）

東京モノレール

羽田空港－浜松町（山手線乗換）－巢鴨（都営三田線乗換）－西巢鴨

京浜急行（都営浅草線直通「エアポート快特」）

羽田空港－三田（都営三田線乗換）－西巢鴨



寺院経蔵の聖教類の調査によって、訓点資料や記録類、仮名交じり文資料等を通して日本語史の上で新たな知見が数多く得られるようになった。この知見のうち、特に語彙・語法や文体の面では、日本文学研究の点からも注意されてよい言語事実がしばしば認められ、こういった知見を共有することによって相互補完的に双方の研究を推進してゆく可能性が広がっていくように思われる。ここでは、石山寺、高山寺、仁和寺、東寺などの経蔵文献調査によって得られたいくつかの言語事象を取り上げて、それと、説話・軍記・歌論・随筆といった文学作品の世界との接点を求めて研究領域の拡充の可能性を述べてみたい。

まず、最初に訓点語に関する問題を取り上げる。従来、訓点資料に見える語彙は漢文訓読によって生じた語彙、語法であるとおおまかに捉えられてきたが、そこに使用されている語彙は必ずしも訓読のための用語ばかりでなく、さまざまな位相語が含まれている。また、漢文訓読を通してさまざまな意味用法の変容を遂げた事例もあって、訓点語の意味用法には尚多くの問題を含んでいる。こういった点を踏まえて、文学作品の理解や解釈に関連する事例を紹介してみたい。次に、記録体などの日本漢文、また仮名交じり文で書かれた仏教文献に現れた語彙・語法について、これも文学作品の解釈の手がかりになる事例を見てみる。さらに、聖教類の文体(表記体)の問題を取り上げることとする。聖教類の文体は実に多種多様であって、その時代における日本語諸文体の箱庭的様相を呈している。特に文体の面に注目することで文学作品のテキストの有り様の一端について説明を試みることにする。

## 台密と天台本覚思想

早稲田大学 大久保良峻

天台密教、すなわち台密は円密一致を提唱し、中国天台の教学と密教との融合を顕揚する。従って、空海に始まる東密の密教とは立脚点を異にする。とはいえ、台密と東密は、それぞれ密教として共通の教学を有している。つまり、それらの特色ともなる差異は、それぞれの着眼点の違いから導き出されるのである。特に、仏身論については、三身・四身の一体性を力説するのが台密の立場と言える。そしてそれは、中国天台の教学の上に成り立っていると言っても過言ではない。そのことは、狭義には釈迦と大日の一体説となり、広義には一切諸仏一体の義へと聯繫する。更に、そういった観点が曼荼羅の諸尊に当て嵌まることは容易に推察されるであろう。

このような台密の思想は、現実肯定思想と言わなければならない。しかも、そこには天台教学の継承・展開と捉えうる教義が見られる。要するに、中国天台の思想そのものが現実世界を尊重する見地に立っているのである。そして、中古天台では、密教を基軸とすることなく、本覚思想と言われる現実肯定思想が論じられる。中古天台の本覚思想は、中国天台教学の独特の展開と評しうる。時として、煩瑣な思索が議論される中で、凡夫を中心とした仏教観が天台教学によって示されている。それでは、その思想をどのように捉えたらよいのだろうか。私見としては、天台教学の一面を抽出して現実肯定を標榜したということである。天台本覚思想は、中国天台の中に胚胎し、平安初期の比叡山で密教の隆盛と共に研鑽された現実肯定思想を承けて確立していくのである。その核心として、一貫した現実感が基底に存することが重要なのである。

## 1. 『神祇講式』の「社壇浄土」説について

佛教学大学院 星 優也

講式とは「講経法会の式次第」である。列島中世において多様な展開をとげたことで知られており、近年は春日や八幡など神々の講式が儀礼研究の側から注目されている。

本報告で取り上げる『神祇講式』は、鎌倉後期には成立していた「神祇系講式」で、春日や熱田、八幡など個別の神々ではなく、「神祇」という普遍的な存在そのものを儀礼の対象とする講式である。

これまでの研究では、『神祇講式』は修験道研究、神道史研究から注目され、無住『沙石集』巻一「太神宮御事」や、初期両部神道書の『中臣祓訓解』との関連が明らかにされて中世神道書として位置づけられるとともに、作者についても解脱房貞慶ではないかと指摘されて来た。以上の先行研究をうけて、これまで報告者は、『神祇講式』の表現が持つ歴史性と宗教性、そして『神祇講式』そのものの流布と展開について考察してきた。

今回注目することは、『神祇講式』に見える「社壇浄土」説である。神社が浄土であるとすると「社壇浄土」説は、春日や熊野、叡山など列島中世において展開しているが、『神祇講式』は「諸社瑞籬則嚴浄仏土也」という式文中の言葉に代表されるように、個別の神社を越えた列島すべての神社が、実は浄土であると説き、さらに神社へ詣でることが浄土への「初門」であるとする。

普遍的な「社壇浄土」説を語る『神祇講式』は、これまで春日信仰の資料に類似する文言が見られることが注目されて来た。本報告では、あらためて『神祇講式』と春日信仰のテキスト群との比較検討を行い、『神祇講式』固有の「社壇浄土」説について考察する。そして最後に『熱田講式』をはじめとする、『神祇講式』の「社壇浄土」説が引用される唱導関係資料の表現について言及することで、本格的な研究が進んでいない『神祇講式』及び「神祇系講式」研究の可能性について考えたい。

## 2. 『伝法絵』にみえる思想—『善導寺本』『国華本』を中心に—

大正大学総合仏教研究所研究生 平間 尚子

『伝法絵』は、法然上人絵伝類の中、最も古い成立とされる作品である。原本は現存しないが、転写本である『善導寺本』の奥書から嘉禎三年（一二三二）、軌空の制作であることがわかる。考察を進める中で、『善導寺本』『国華本』には、他の法然伝には見られない思想内容が確認できた。具体的に示すと、『善導寺本』には「靈山同聴法華」、「国華本」には「此界一人念仏名」「如意臨席」の思想内容が表現された箇所が見受けられる。

「靈山同聴法華」とは、南岳慧思と天台大師智顛が、過去世において靈鷲山で积尊から『法華経』を共に聴いたことを語り、師弟の関係において他に見ることができない特殊な説話である。

「此界一人念仏名」とは、法照『浄土五会念仏略法事儀讃』の一節で、称名念仏による功德が説かれている。法照は唐中期の浄土教者で『善導後身』と尊称され、五台山・太原・長安地方に五会念仏を宣揚した人物である。

五台山を巡礼し、長安に入った慈覚大師円仁は、法照由来の五会念仏を修めて帰朝し、その後、比叡山に常行三昧堂を建立し、五会念仏に源流する引声念仏（不断念仏）を弘めた。塚本善隆氏によれば、平安朝時代の京都を中心とする念仏教普及流行の重要な原因が、この常行三昧堂の円仁伝来の念仏にあると指摘されており、宇都木言行氏が指摘されているように、平安から鎌倉時代の仏書・文学作品に、『法事讃』からの引用が確認でき、加えて法然の門弟の複数の作品に「此界一人念仏名」の文言を確認することができた。

「如意臨席」とは、南岳大師慧思と天台大師智顛の附法に関する一節である。ある講義で講師に選出された智顛は、これまで慧思から受けた教えを正確に伝えることができた。講義の後、師の慧思が如意を手を持ち思想の

継承が正しく行われたことを慧思に示す一節である。

本発表では、『善導寺本』『国華本』に見受けられる思想に注目し、『伝法絵』の持つ思想の特徴について言及したい。

### 3. 大行寺信暁『山海里』の書誌学的研究

#### —— 近世後期京都に於ける真宗末寺の出版 ——

福井大学 膽吹 覚

信暁は江戸後期に、京都に真宗佛光寺派大行寺を創建し、本山佛光寺の学頭を勤めた人である。彼の代表作である『山海里』は全一二篇三六冊の仏教随筆集で、近世から現代に至るまで永く親しまれてきた。本発表では版本『山海里』に関する基礎研究として、大行寺本、本山佛光寺本、大谷大学本、日文研本、駒澤大学本、光丘文庫本、東洋大学本、新潟大学本、発表者架蔵本二種の計一〇種を対象として、その版權と弘通所を中心に考察した。その結果は以下の通りである。

版本『山海里』は江戸後期の文政八年にその初篇が刊行され、その最終篇である第一二篇が刊行されたのは安政五年であった。その版權は全一二篇の中、第五篇以外の一一篇は全て大行寺蔵版本（私家版）であった。ただし、その第五篇は本山佛光寺が単独で版權を有するものと、佛光寺と大行寺とが（本山と末寺）とが版權を共有するものの二種類が確認された。また、その版權は各篇第一冊表紙見返しに記載されることが多かったが、記載された版權が、弘通所の書肆によって削除された事例も確認された。

『山海里』の弘通所は京都を中心に、大坂江戸を含めた三都、そして、肥前、肥後、信州の書肆が名を連ねている。中でも京都では菱屋友五郎と菱屋友七を中心とする菱屋一党が『山海里』の出版に大きく関わっていたことが明らかになった。また、永田文昌堂がその蔵版目録を挿入するかたちでその流通に携わっていたことも注目される。永田文昌堂は本山佛光寺の御用書林である。その一方で弘通所が記載されていない本も多く確認された。その初篇から第四篇までは弘通所を記載したものより、それを記載しない方が多かった。初篇から第四篇までは大行寺やその掛所である大坂の高庵を主な弘通所として、佛光寺派の門信徒並びにその縁者に流布していたのでなかったらうか。

## 4. 越南本『禪苑集英』における仏教史観

明治大学大学院生 佐野 愛子

東アジアを視野に入れて仏教を考える際に、ベトナムという地域はもはや欠くことのできない地域といえよう。そこで本発表では大越（李陳黎朝の国号）地域（現在の北部ベトナム地域）の仏教を知る上で重要な資料である『禪苑集英（Thiền Uyển Tập Anh）』を取り上げ、大越の仏教史観を考察したい。

そもそも『禪苑集英』は唐代から李朝（一〇〇九〜一二二六）末の法灯の系譜と僧伝を、無言通派三十八人、毘尼多流支派二十九人、草堂派十九人の三派にわけて記述した書である。編者は不明であるが、記述内容から無言通派に関わりのある人物と想定される。また永盛十一年（一七一五）の刊本が現存最古のテキストだが、陳朝期（一二二五〜一四〇〇）成立の『大越史略』と類似した記述が多いことから、少なくとも原型は陳朝期に成立していたと考えられる書である。

さて日本の仏教伝来における認識が「インド↓中国↓日本」と三国史観であったことは述べるまでもない。一方、中国との関係が深い大越だが、この地域にもたらされた仏教は中国から伝えられたものだけではなかった。北属期（中国に支配されていた時期）にすでにインドや東南アジアなどから来た僧侶が大越の地で活動しており、中国南部に渡って仏教を広めていたのである。著名なものにはたとえば康僧会がいる。

このような実際の仏教伝来を受け、『禪苑集英』は大越の仏教をどのように叙述しているであろうか。本発表では『禪苑集英』の記述を通して、大越における仏教史観の特徴を考察し、東アジア漢文文化圏における仏教文学研究の一助としたい。

## 5. 『発心集』における発心論の三者比較

早稲田大学高等研究所 森 新之介

『発心集』は、蓮胤鴨長明（久寿二年「一一五五」か建保四年「一二二六」）が晩年に編纂した仏教説話集である。伝本には版本八巻と写本五巻があり、前者の慶安四年版は今日伝存の諸本で最も原形に近いと見てよい。しかし、幾つかの箇所は後人増補の偽作でないかと夙に疑われており、築瀬一雄は前六巻の偶数巻末と後二巻の全体が後人増補だとする説を唱えた。

築瀬説は一定の支持を得たが、後に異論も生じた。殊に真偽が決していないのは、疑いのある箇所で分量が最も大きい後二巻である。

八巻本の後二巻が前六巻への増補であることは、五巻本などとの比較により論証されている。また、巻第八最終話に付された跋と通称される長文評語などは蒙古襲来より後の作だ、とする指摘もある。しかしこれらの先行研究だけでは、後二巻全体が後人増補の偽作だとも、巻第八最終話などだけが後人増補の偽作で後二巻の大部分は蓮胤増補の真作だとも考え得てしまう。『発心集』の四分の一ほどが真偽未決となっていることは、同書の研究だけでなく、蓮胤の研究にとっても重大な問題である。

そもそも後二巻の真偽を鑑別するためには、前六巻の蓮胤真作箇所と比較して異同を探らなければならない。しかし従来の研究には、後人増補の疑いがある偶数巻末とそれ以外を峻別せず、前六巻を一体として後二巻と比較する嫌いがあった。このように乱暴な二者比較では、後二巻について正しく理解することが難しくなってしまう。

そこで本発表では、まず前六巻のある箇所が後人増補であることを示し、そこで蓮胤真作箇所と後二巻の三箇所における発心論を比較する。この三者比較によって、後二巻全体が後人増補の偽作であることを従来と異なる視点から明らかにしたい。

『平家物語』は軍記物語であるが、楽器や舞、音楽など芸能関連の説話も多く収載されている。

延慶本「平家物語」には、清盛の異母弟である経盛の笛にまつわる説話も残されており、経盛一族は芸能に秀でた一族として扱われている。経盛が笛の名手であったという歴史史料は見つかっていない。経盛、経正、敦盛の一族を、芸能に秀でた家系として描こうとする延慶本「平家物語」編者の意図により、経盛笛説話が生成された可能性について、以前考察したことがある。(拙稿「延慶本平家物語」経盛音楽説話について『国文学踏査』二二二号 二〇一〇年 三月)本発表では、『平家物語』における平経正の音楽説話について考察していきたい。平経正は、『建礼門院右京大夫集』や『残夜抄』にも琵琶に関する記述が残っていることから、琵琶の名手であったことは史実と考えられる。延慶本「平家物語」第三末・卅一「経正仁和寺五宮御所参ズル事付青山ト云琵琶ノ由来事」では、平家都落ちに際し、経正が仁和寺に青山の琵琶を返上する場面が描かれる。この青山の琵琶については以前考察したが(中世歌謡研究会大会 二〇一五年八月)、本発表ではそれを踏まえ、経正説話生成の一端について考察し、特に出典と考えられる『古事談』と『平家物語』の関係を報告したいと考えている。

## 7. 伊勢における西行の思想と信仰をめぐって

金城学院大学 松田淳一

本報告は、昨年刊行の拙稿「平安末期宗教思想史と西行—西行にとって〈伊勢〉とは何だったのか—」(『西行学』六号)の続編に当たる。

先ず押さえるべきは苦米地誠一氏による、西行は覚鑿の孫弟子であって四度加行を満行した「阿闍梨」(『プロの真言密教僧だったという最新の議論である。氏の説に従うならば、西行は五相成身観などの高度な観想行もマスターしていたことになる。この「西行」阿闍梨』説は容易には否定し難く、既成の西行像<sup>イメージ</sup>に転変を齎すものかと思われる。

一方、大場朗氏の近論は西行における天台思想を重視し、宇津木言行氏も伊勢で成立した晩年の『聞書集』「十題十首」「十楽歌」には、天台恵心流の観想念仏(『往生要集』)や本覚思想とも関わる観心念仏の影響(『観心略要集』)が強いことを論じている。西行の思想における天台的要素も無視はできない。本報告では覚鑿系密教(月輪観の問題など)と天台恵心流浄土思想との構造的な繋がりについて、院政期宗教思想の展開に即して若干の見通しを示す。そこから真言宗の観想を実践し、天台浄土教系統の観想・観心の領域にも通じてゆく西行の思想的性向について考えたい。

以上の考察を和歌の読みに及ぼしてみる。例えば天照に奉納された『御裳濯河歌合』の36番の神路山をめぐる歌は、平田英夫氏の注釈研究を参照する時、密教の観想によって伊勢内宮の神路山の〈奥〉に入ってゆく意との読みが拓かれる。『聞書集』には、実際に吉野山の奥に深く入ることを詠む歌もあるが、本報告では特に『千載集』所収同歌の詞書「大日如来の御垂迹をおもひてよみ侍りける」に留意し、西行の〈天照—大日〉信仰と観想の視座に拘ってゆく。

院政期には神社に参籠・祈念して本地仏を神秘的に探求・感得せんとする聖達が説話に確認されるが、伊勢においてかかる宗教実践は『天照大神儀軌』『天照大神儀軌解』という一具の観想・念誦法のテキストに刻印されるのである。両テキストの世界と接する地点に、この歌を生み出す精神的背景<sup>コンテキスト</sup>が認められよう。